

## 『幼児の社会的スキル訓練について』

### Social Skills Training for Young Children

佐藤正二<sup>1</sup>

Shoji Sato<sup>1</sup>

宮崎大学の佐藤でございます。どうぞよろしくお願いたします。ただいまご紹介いただきましたように、ここ10数年、社会的スキル、特に子どもの対人関係の発達、それから対人関係のつまづきをどうやって克服するかを研究テーマにしてきました。今日は、社会的スキル指導を中心にしてお話しますが、その前に、現在、子どもたちがおかれている、特に社会性に関わるような問題点について、お話しさせていただきますたいと思います。

#### 【EQ と社会性】

皆さんも既にご存知かと思いますが、3年前に「EQ」、つまり『こころの知能指数』という本が、非常に話題になりました。3年前に私も出版されて1週間くらいで、この本を買って読んでみました。そうしますと、対人関係に関わるのが、これから非常に大事であって、しかも、社会で成功するためには、「IQ」ではなくて「EQ」のウエイトが高いと書いてありました。情緒指数(Emotional Quotient)というようなことばで呼ばれていますが、その内容はいわゆる社会性の能力に関わることでして、これが社会の中で成功をおさめるうちの8割くらいを占めていて、知能指数は2割程度だと書いてありました。この本では、対人関係能力を中心として、社会性を伸ばしていくことが、ノーマルな発達の中でも非常に重要であるというようなことが指摘されているわけです。

その後、一時、この、EQに関心を持ちまして、いろんな本を調べてみました。日本人の方が書いた本、これをネタにして書いた本は、10数冊は出ていると思います。そのなかで、内山喜久雄先生が、講談社から『EQその潜在力ののびし方』という本を出版されています。その本の中でEQの内容が詳しく書かれ

ていますので簡単に説明します。

EQには10の要素というのがあるのだそうです。他人への気配りとか、あるいは自分の感情や内面を察知する能力とか、それから判断力、やり甲斐感、樂觀性。それに、自己コントロールとか、愛他心、それからこのあたりから非常に対人的になってきますけれども、他人の感情や考え方を主観的にわかること、それから今日の話題になっています社会的スキル。そして最後に自分と他人のどちらにも利益になるようにはからう能力、これを社会的デフトネスと呼んでます。これはたぶんわれわれが社会的スキルということばを使うとき、あるいは対人関係能力というときには、このEQの要素がかなりの部分含まれているのではないかと思います。我が国におきましても、やはり社会性の発達が、人間の健康的な生活の中で非常に重要な要素となることが主張されてきております。これは、ある面では当然のこととして、今、子どもたちの中で起こっておりますいろいろな問題、たとえば、不登校やいじめでもそうですけれども、そのほとんどが社会性だとか対人関係という部分と共通に関わりあっていることが多いわけです。学校に行かないとか、いじめが起こることとは、これはあくまでも現象ですから、その現象の背後にあるものを調べていきますと、どうしても、その子どもたち自身の社会性のレベルの問題にいきあたってしまうのです。EQのような本がベストセラーになる背景には、一般の人たちにとっても社会性の育ちということが、もう無視できないようなところまできているからではないかと思います。

#### 【最近の子どもの特徴】

さて、私たちが一般に現代の子どもたちの社会性というものがどういう状況になっているかと考えて

1 宮崎大学教育文化学部助教授

みますときに、子どもたちの特徴として次のようなことがよくあげられます。

まず1つめは、「最近の子どもたちは大人になりたがらない」。これは大分前からそういう傾向にあったような気がいたしますけれども、ある調査によりますと、小学生・中学生あわせて、「大人になりたいですか」という質問をしますと、約4分の3がなりたくない、今のままがいいと述べます。

それから同時に、今の子どもたちにいろいろな調査を行ってみると、心身の疲れを示す子どもたちが、小学校の段階から出てくるわけです。複数回答させますと、「夜眠れないことがありますか」という問いに、「はい」と答える小学生が2割から3割いるわけです。「食欲がないことがありますか」、これにも、結構高い水準で出てくるんですね。これがずっと慢性的に続くといろいろな問題が出てくると思います。まず今まで、常識的に考えてみますと、特に小学生で、夜眠れないとか食欲がないとか心配事があるとか、ということが前面に出てくることはそんなになかったのではないかと思います。それだけ、われわれの世代が子どもだった頃は、楽観的なことが多かったせい、心身の疲れがあんまり大きくクローズアップされることはまずなかったはずで。

それから3つめになりますが、最近の子どもたちの中で、無気力ということがとりあげられるようになりました。無気力化傾向というのは、児童、青年、大人でも指摘されています。不登校、大学生の無気力症、大学院生のモラトリアム傾向などは、大分前から指摘されておりました。さらに、社会に出た後サラリーマンでも無気力症の人たちが出てきています。こういう傾向が、全般にわたって出てきつつあるといわれています。こういう人たちに共通してみられるものは、1つには耐性未成熟、別な言い方をしますと堪え性がない、我慢する力がない、ここでは自己コントロール能力の不足というふうに取り上げておきます。こういった能力が育っていないうちに大人になっているのではないかとというのが1つです。それからもう1つは、責任感の不足というのを取り上げる人がいます。つまり、常に自分のやりたいことはやるけれども、自分のことについてすら自分で責任をとろうとしない。これは指示待ち人間などと言われたりしました。大分古いことばになりましたけれども。こういう傾向は今でも続いていると思います。

そして4つめが、これをこれから詳しくお話ししたいと思っておりますが、対人関係能力の低下です。つまり、社会的スキル、人との関わりに必要な技能とか、

コツとかを身につけている子どもがだんだん少なくなっているのではないかという指摘であります。このようにみえますと、子どもたちの社会性の発達の遅れというのは、実は全般的にわたって進んできている訳ですが、私のような研究をしている者にとって興味がありますのは、4番目の対人関係能力の低下ということです。よく最近、少子化傾向が続いて、子どもたち同士のやりとりが少なくなっている、しかも、子どもたちが大人のいないところでつきあう機会が少なくなっていると言われます。そうなってくると、どうしても対人関係をつくっていく機会に恵まれないことが、子どもたちの対人関係能力を悪化させている原因の一つになっているように思います。

最近の子どもたちは、いろいろなけいこ事をやっています。スポーツもひよっとしたらわれわれの子どもときよりも盛んなのかもしれませんが、常に子どもたちの活動の中に大人が介入しているということが今の子どもたちの活動なのです。これが決定的に、昔の子どもたちと今の子どもたちとの違いだろうと思います。スポーツ少年団というのがあります。たとえば野球を例にしてみます。最近の子どもたちは、小さいときから野球の技術を教えられます。たぶん技術は今の子どもたちの方が、われわれが子どもであった頃よりも数段上でしょう。しかし子ども達をよくみてみますと、野球はうまくこなすけれども、野球の準備はしないことが多い。つまり野球そのものの準備はしますけれども、そこへ行って線を引くとか掃除をすとか、いうのはみんな大人がやっているわけなんです。そして、もうできあがったコンディションのなかで、子どもたちは野球だけをする。こういったことがはたして、子どもの社会性を育てるために、本当にいいことなのかどうか考えてみなければなりません。かつての子どもたちは、そういう大人たちが介入しない場面では、全部自分たちでやっていたわけなんです。ですから裏方の仕事もしつつ、表方というのかどうかわかりませんが、表の仕事もしながら、それが1つのバックとなっていました。今はどうも、見えるところは子どもたちがやりますけれども、そうでない裏方は大人がやっているところが非常に多いように思います。

これと関連して印象的なのが、プールの監視です。今プールの監視は、保護者がやりますが、年々おとなの数が多くなっています。手をつないだらプールの周りをぐるっと囲めそうなくらい周りに大人が張り付いているわけです。そして鋭い視線で、安全かどうか子どもたちの様子を大人たちが見ている。その中

で、子どもたちは楽しく遊んでいるように見えますけれども、ああいう目の届く中で、本当に子どもたちがリラックスして遊べるのかなと思います。安全面とか、怪我とか、いろんな面で心配されての配慮でしょうが、人から身を守ってもらってばかりでは、危機的な場におかれたときに自分の身すら守れない子どもたちを多く作ってしまうのではないかと思います。大切なことは、子どもだけで活動する経験を積ませることによって、その中から、自分で自分の身を守る、仲間同志で互いに身を守ることを子どもたちが学んでいくことではないでしょうか。

### 【現代の子どもが抱える不幸】

今の子どもたちのおかれている状況というのは、いろんな面で、ある意味では不幸な感じが私にはするわけです。

このような状況が子どもたちの中にあるということは、間違いない事実であります。このような状況の中で子ども達自身が自立した状態で自分のやるべきことをやって大人になっていくために、私達は何をしなければいけないかということ、真剣に考えなければならぬ時期にきていると思います。私個人の意見を申しますと、人間が社会の中の一員として生きていくためにまず必要なのは、人との関わりだろうと思います。どんな自立した人でも、1人で生きていくということは不可能に近いことですから、誰かと関わりをもって、初めて社会の一員となるわけです。そのためには、人間同士の関わりというのは、非常に大きな意味合いをもつと同時に、できれば非常に小さい時期からそういう人との関わり方の指導を意図的にすすめていくような、そういう試みが必要になってきているのではないかと考えます。

どうして、子どもたちが社会性の面で、うまく機能しなくなってきたのでしょうか。皆さんもこの点については、1つ、2つはご意見をお持ちのはずだろうと思います。いろいろ人がいわれているのを集約しますと、今子どもたちのおかれている状況に影響を与えているものは、1つはまず家族、あるいは地域、こういったところの教育力が、間違いなく低下していることです。よく、幼稚園・保育園、あるいは小学校の先生方とお話していると、「最近、子どもも対人関係でずいぶんうまくいかないことが多くなってきたけれども、あわせてやっぱり親御さんもひどい」という話はよく聞きます。非常識だなんていう人も中にはいます。「ああいう感じで毎日親子が接

していると、それは、子どもたちも歪んできますよ」、という話もされるわけです。それが1人や2人ではなくて、会う度にそんなことをいわれますと、家庭の中で今一体何が起きているのか、それをもう一度見直さなければいけないという感じがしております。

それから、今の子どもたちは、友だち同士の間の関係が非常に希薄化しているのも事実です。私は児童心理学がもともと専門ですから、教科書なんかみますと、ギャングエイジとか、ギャング集団とかいう名前前で、小学校2、3年生くらいになってくると、子どもたちは5、6人から7、8人の非常にまとまりの強いグループを作って、他に対して排他的になる。それが自然発生的に起こるんだと、こう書いてあります。そしてマイナス面は、かたまって他を排除するところ、プラス面は自分たちで、いわば自主集団として、自分たちでルールを作って、互いに守りあうという、ある意味では非常に自律的な集団ができるということです。そのときに、自然発生的にということばが出てきますと、放っておいてもみんなそうになっていくんだと誰でも思うわけですが、最近指摘されていますのは、どうもそういう大きな集団は子どもたちの中にはない。凝集力の強いまとまりのよいグループはないのではないかとということです。最近趣味の会のようなものが多くて、気が向いたら数名の子どもたちが集まって、興味が分かれたらすぐ別れてしまう。そして、一緒にになにかをつくるために集まっていくのではなくて、何かをするだけの集団になっているようです。

ある調査によりますと、「あなたは友だちが何人いますか」という質問に、日本の子どもたちが一番たくさん的人数を挙げたといえます。通常友だちといったら3人4人名前が挙がるのですが、それよりもずっと大きい数だったんですね。どうしてそんなに友だちが多いのかと思ったら、知り合ったらみんな友だちと思っている人がいるわけです。最近の子どもたちをみていて不思議だなと思うのは、友だち同士が集まって、一緒にいるわけですがけれども、みんな違うことをするんです。ですから、何も人といなかったり、一緒に活動しなくても、けっこう自分で楽しめることが多かった分だけ、人との接触が少なくなって、仲間関係の希薄さが助長されるのではないかと思います。

最後に、親御さんにとりまして、特に小学校になりますと、社会性というより何といても学力、勉強の話が重視されるようになります。子どもが家に帰ってきたときの親の第一声が「宿題は」です。幼稚園のときには「元気に遊びなさい」と言っていた親御さん

でも、子どもが小学校に入学するとぐっと軌道修正が行われてしまうところがあるんです。一般に、社会性というようなものは後で簡単に修正がきくと思っ  
ている方が多いようです。考えてみますと、社会性の面というのは人間の土台ですから、こちらの方が本当は修復するのが学力よりも難しいはずなんですけれども、やっぱりルートが明確に見えているもの、そちらの方に親御さんの目が向かっていることは、間違いない事実のようなんです。それで、高校生、あるいは大学生になっても、友だちとどうやってつきあっているのか分からないという子どもたちが増えているのが現実ではないでしょうか。

### 【社会的スキルとは】

さて、社会的スキルという考え方なんですけれども、スキルという言葉からみても出所が日本ではないことはすぐにわかります。ここ20年くらいの間に、世界各国で対人関係の能力をのばすきっかけとして社会的スキルを取り上げようとする研究者が増えてまいりました。スキルとは何かというと、これは1つの技術と考えるいただければいいわけです。つまり、対人関係は、我々が毎日やっているわけなんですけれども、それは無意識にやっています。意識せずにやっておりますけれども、相手と円滑にコミュニケーションするためのコツとか技術とかを皆さんは既にマスターしています。何も不都合がなければ、それはスムーズに流れているということなんです。従来、対人関係がまずいとか、どうもあの人是对人関係が苦手だと言われるような人たちは、そういう性格の持ち主だと考えられることが多かったのです。だから、あの人人間関係がまずい質ということばを使ったりします。あの質というのは、まさしく、性格的なものを指すわけなんです。性格だといわれますと、性格というのはそう簡単に変わるものではないと思ってしまう。それに対して、わたしたちが今考えておりますのは、別の見方です。つまり対人関係のやりとりの中には、学べば誰でも身につけることができるようなコツのようなものがある。うまくいかない人は、そのコツを身につけていないからうまくいかないか、あるいは間違っただけでそれを使ってしまっただけでうまくいかないんだ、と。だとすると、そのコツをマスターしていない人には、新しく教えればいいのか、あるいは間違っただけで身につけた人に対しては修復してあげればいいのか。つまり、対人関係の技術というのは、学ぶことによって身に付くんだという考え方に立つ

わけです。そうしますと、新しい展望が開けてきます。つまり、対人関係がうまくいかない人は、そのコツを今から学べばいいわけですし、それから、自分で変えようと思っている人は、修復するための練習をすればいいというわけなんです。

### 【社会的スキルの問題とは】

これから述べますデータは、ずいぶん古いデータなんですけれども、Greshamというアメリカの心理学者が、対人関係がうまくいかない人たちが社会的スキルに欠けるためにいったいどういう影響を被っているかということ、大体6項目くらいにまとめたものです。みますと、社会的スキルに欠けていて、対人関係がうまくいっていない人たちは、それがうまく円滑にやっている人に比べて、学校での不適応、それから学校からのドロップアウト、それから成人になってからの精神保健上のいろいろな問題の出現頻度が明らかに高い。それから、2つめに子どもの場合ですと、クラスのなかで人気の高い子どもにはなれない、それから拒否される割合が非常に高い。それから3つめに、これは障害児ですけれども、知的障害の子どもさんとかあるいは最近よく出てまいります学習障害(LD)の子どもさんとか、行動障害の子どもさんなどは、やはり学級のなかで拒否を受ける頻度が非常に高いようなのです。つまり、彼らは基本的に共通して対人関係のまずさというものを抱えているわけです。それから4つめ、知的な発達とかあるいは学業成績というものを比較してみますと、対人関係がうまくいっていない人たちの成績は良くないという結果が出ています。これは冷たい結果ですけれども。それから、5つめはストレスに関わる問題です。イライラ感とか、あるいは抑うつ、不安とか、無力感、身体症状などのストレス反応というのは、社会的スキルがまずい人たちの方が非常に高く出ている。それから6つめですが、社会的スキルがまずい家庭は、家庭の中にトラブルが多い。多い原因の一つは、本人もですけれども、親も社会的スキルが低いことがあります。スキルの低いもの同士と一緒に生活していると、いろいろなトラブルが起こるといことは十分に考えられることです。このように、生活全般にわたって、対人関係がうまく機能しないといろいろな弊害が出てくるのが分かってきたわけです。ここまですと、やはりこういう子どもたちに対して、何らかの介入を考えていかなければならないということで、社会的スキルの訓練が行われるようになって

てきました。最近では、社会的スキル訓練は、子どもから大人までのすべての年齢層で行われています。

### 【社会的スキル訓練の実際】

社会的スキル訓練の考え方は、単純すぎるほど単純でありまして、対人関係がうまくいかない人は、社会的スキルに欠けており、その社会的スキルを教えてマスターさせれば、対人関係が改善されるだろうと考えています。

現在、子どもを対象にした社会的スキル訓練は、大きく分けると3つの視点から行われています。

1つは発達の視点という立場。これは特定の誰かではなくて、子どもたち全般の社会性の発達を促すという試みのなかで、子どもたちのスキルレベルを引き上げていこうとする動きです。最近、私どもの研究室でも、学級を1つの単位とした社会的スキル訓練を行っております。それはある特定の子どもを対象とするのではなくて、そのクラスの子どもたち全員の対人関係能力を引き上げていくことが、社会性に関わるいろいろな面での予防効果をもつのではないかという考えに基づいております。

2つめは予防的視点と呼んでいますが、1つめも予防的視点といえれば予防的視点ですが、この場合は、明らかに現時点で社会的スキルがうまく働いていない子どもを対象とします。まだ大きな心理的なトラブルを起こしていない子どもに対して、早期発見、早期指導を試みていこうというのがこの視点からの取り組みです。その中で、よく対象とされている子どもたちは、友だちの中で緊張・不安が強くて、友だちとのやりとりがうまくいなくて、孤立している子ども、あるいは非常に攻撃性の高い子、乱暴な子ども、それから人のじゃまをよくするとか、ルールを守らないといった行動が顕著な子どもたち、それから自分で言いたいことがあってもなかなか自分で自己主張できない子どもたち、そして最後はクラスのなかで友だちからの受容度、受け入れが低い子どもたち、こういう子どもたちに対して、大きな問題が出現する前に、適切な社会的スキルを指導して、そして少しでも改善していこうというのが、予防的視点として行われている社会的スキル訓練です。

それから、3つめは、もう現時点ですでにいろんな支障が出ている人たち、この人たちに対する取り組みです。ここでは臨床的治療的アプローチと呼んでおりますけれども、例えば子どもの中でも、非常に強い引っ込み思案、孤立傾向をもっているとか、あるい

は極度に攻撃行動、妨害行動が強い子どもたち、それから最初から社会的スキルが低く出てくることが想定できるような子どもたち、例えば知的障害の子どもたち、それから先ほどちょっと出ました学習障害の子どもたち、対人不安が非常に強い子どもたちなどが対象になります。成人では、うつ病の患者さんだとか、精神分裂病の患者さんの日常生活への適応を促す試みとして社会的スキル訓練が行われております。その場合には社会的スキル訓練とは言わずに、生活技能訓練療法という名前が使われています。それはどうしてかという、対人関係にかかわらず、精神分裂病の患者さんには、もっと他にも日常生活を円滑にすすめるための力が十分に育っていないことで、うまく日常生活に適応できないという人が多いのです。そういう人たちに対して、生活全般にわたって治療的な試みを行っていかうとするためにこういう名称が使われている訳です。

### 【幼児のための社会的スキル訓練】

さて、私どもは、こういう対象者のなかで、特に幼児に焦点をおいてきました。幼児のなかでも引っ込み思案の強い子、攻撃性の高い子ども、妨害行動を示す子ども、こういうところに焦点を当てて、予防的視点から幼児教育の中にこういう指導を取り込んでいこうと考えて社会的スキル訓練を実践しています。昨年度と一昨年度、いわゆる指導マニュアルというのを作成しました。1つは個別指導のためのマニュアルです。これはいわゆる個別指導、それから小集団とって小さなグループ(3, 4人~4, 5人くらい)を対象にした指導マニュアルで、これを平成9年度に作りしました。もう1つは、集団社会的スキル指導用のマニュアルで、これは学級を1つの単位として、スキル指導を実施していこうという試みでして、平成10年度に作成しました。平成11年度は3年目ということで、これまでに作成した指導マニュアルを、実際に現場の保育園の先生方に研修を通して、技術を身につけて頂いて、先生方が実際に御自分のクラスで実践していくという課題になっています。

社会的スキルのいろいろな話をしてきましたけれども、やはり、まだまだ完成した状態ではありませんで、これから先、いろいろな形の指導法を考えていかなければなりません。これまでの社会的スキル訓練は、軽症の子どもたちを対象とすることが多かったのです。しかし、本当にスキル訓練の効果があるなら

ば、もう少し重症な子どもたちに対象を広げていかなければなりません。それから今度、その重症な子どもたちを対象にすると、やっぱりスキル訓練だけではうまくいかないことがけっこう出てきます。最近のプログラムはみんな、対象児の症状に合わせたプログラムを作成するようになってきています。プログラムによっては、スキル訓練に加えて親訓練を一緒にするとか、同じスキル訓練の中でももっと他のタイプのスキル訓練と一緒にするといった、パッケージ化プログラムが徐々に普及してきています。そうなりますと、実際に訓練を担う人も、ひとりの力だけではなかなか難しくなってきたり、それぞれのスペシャリストを作って、その人たちが共同で指導するような形になっていくのではないかと思います。

### 【今後の課題】

最後に社会的スキル訓練の外国での最近の動向について触れてみたいと思います。

最近の研究動向の一つとして包括的介入が実施されるようになってきました。この包括的介入は、学校で行われることが多くなっています。まず、学校の先生に、子どもと接するときに必要なマネジメントの仕方を教えます。それから、その対象となっている子どもに対する社会的スキル訓練も同時にやります。それと同時に、対象児の家庭も介入の対象となるのです。これは親に対して、子どもとの接し方の指導を行うことが中心になっています。こういう介入が必要な子どもたちの母親はいろいろな悩みを持っていることが多いわけです。特に多いのは、夫婦仲が良くないとか、あるいは職場での問題を抱えているとか、あるいはお母さん自身が非常に抑鬱傾向が強くて、子どもへの関わりがうまくとれないなどがあります。そういった悩みを持っているお母さん方には、そのお母さん自身の悩みにも一緒に相談にのってあげます。それから、リスクの高い子どもたちに対して介入を行っていくときには、やはり学校の勉強についていけない子どもたちが多く含まれてきます。そこで勉強を教えることもまた訓練の中にいれていこうということです。ですから、親に訓練し、それから教師に訓練し、それから学業訓練もやる。このような包括的介入プログラムの中で特に注目されているのが、「Fast Track Program」という1992年にアメリカで全米的な規模でスタートしたプログラムです。現在も全米4カ所、同時に進行しているプロジェクトで、都市部で介入を行ったり、あるいは地方でやったりと

か、それぞれ地区を、場所を変えて行なわれています。このプログラムに参加しているハイリスク児は、このまま放っておくと、家庭環境もまずいので、当然小学校か中学校になっていろいろなトラブルがおこってきそうな子どもたちです。そういう子どもたち900名くらいをフォローしているわけです。訓練は幼稚園で、スクリーニングしておき、小学校1年生から最終的には中学3年生までトレーニングを継続するというやり方をとっています。現在のところ、小学校の終わりくらいまでプログラムは進行しているはずですが、はっきりとしたデータはやっぱり初期のものが公表され始めたところです。公表されたデータを見ますと、攻撃性がけっこう減ってきてること、それから、人と人との対立が起こったときに、そういう対立を解決するための問題解決スキルの改善が見られること、あるいは、友だちからの受容度が上がってきているといったような結果が報告されています(Conduct Problems Prevention Research Group,1999a,1999b)。社会的スキル訓練の内容を見ますと、社会的参加、向社会的行動(社会から容認される行動一般、協調性、交代、援助などが含まれている)、コミュニケーションスキル、自己コントロール。(特に怒りコントロール:かーっとなったときとか気分が動揺しているときに、それをどうやってコントロールしたらいいか)などが標的スキルとなっています。このプログラム以外にも「仲間コーピングスキルプログラム」(Prinz,Blechman, & Dumas,1994)があります。これは、先ほどのFast Track Programと同じように行動問題を抱えていそうなリスク児に対する介入です。それから「コーピングパワープログラム」。これは攻撃行動低減を目指す認知行動的アプローチをとるLochmanら(Lochman & Wells,1996)のプログラムです。このプログラムも行為問題を抱えている子どものためのプログラムです。それから、小学校から中学校に移行していくときの子どもたちは多くの問題やストレスフルな状況を経験すると言われています。そういう移行期にいる子どもたちを特に介入の対象とした介入プログラムもDishionらによって開発されています(Dishion,Andrews,Kavanaugh, & Soberman,1996)。Braswellという人たちの介入法は、これは最近日本でも注目されてきております注意欠陥多動障害(ADHD)をもつ子どもたちのための介入プログラムです(Braswell,August,Bloomquist, Realmuto,Skare, & Crosby,1997)。このような子どもたちは、いろんな対人的なリスクを抱えているものですから、そういう子どもたちの対人関係を育成する

ことはとても大切な課題になっています。うつ病の児童生徒を介入対象とするプログラムもあります。Starkという人たちがうつ病の子どもたちに対しても、組織的な介入をしていますし(Stark, Swearer, Sommer, Hickey, Napolitano, Kurowski, & Dempsey, 1998), また Lewinsohn や Hops といった人たちは青年期のうつ病の子どもたちに対する治療プログラムを作成しています(Lewinsohn, Clarke, Rohde, Hops, & Seeley, 1996)。

このような介入プログラムに共通していることは何かというと、ひとつの単独のスキル訓練を行っていくのではなくて、それぞれの症状に合わせた訓練をする、それから、問題解決スキル訓練も行う。さらに、場合によっては、親も一緒に参加するような訓練も実施しています。日本でこういうことが組織的にできるかどうか分かりませんが、段々と、子どもたちのいろいろな問題が多く頻発してき始めますと、こういういろいろな領域のものを組み合わせたような方法論が必要になってくるのではないかと思います。どこまで日本で出来るかどうか分かりませんが、少しずつこういう複合的なプログラムについても、勉強していかないといけないと考えています。これがこれからの課題です。以上で、本日の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(平成11年7月14日、広島大学教育学部「幼児の社会性の発達を支える保育」研究会にて講演頂いたものを編集委員の責任において再録いたしました。)

## 引用文献

- Braswell, L., August, G., Bloomquist, M., Realmuto, G.M., Skare, S.S., & Crosby, D. 1997 School-based secondary prevention for children with disruptive behavior: Initial outcomes. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 25, 197-208.
- Conduct Problems Prevention Research Group 1999a Initial impact of the FAST TRACK prevention trial for conduct problems: I. The high-risk sample. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 67, 631-647.
- Conduct Problems Prevention Research Group 1999b Initial impact of the FAST TRACK prevention trial for conduct problems: II. Classroom effects. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 67, 648-657.
- Dishon, T.J., Andrews, D.W., Kavanaugh, K., & Soberman, L.H. 1996 Preventive intervention for high-risk youth: The Adolescent Transitions Program. In R.D. Peters & R.J. McMahon (Eds.), *Preventing Childhood disorders, substance abuse, and delinquency*. SAGE Publications
- Lewinsohn, P.M., Clarke, G.N., Rohde, P., Hops, H., & Seeley, J.R. 1996 A course in coping: Approach to the treatment of adolescent depression. In E.D. Hibbs & P.S. Jensen (Eds.) *Psychosocial treatments for child and adolescent disorders: Empirically based strategies for clinical practice*. American Psychological Association, 109-135.
- Lochman, J.E. & Wells, K.C. 1996 A social-cognitive intervention with aggressive children: Prevention effects and contextual implementation issues. In R.D. Peters & R.J. McMahon (Eds.), *Preventing Childhood disorders, substance abuse, and delinquency*. SAGE Publications, 111-143.
- Prinz, R., Blechman, & Dumas, J.E. 1994 An evaluation of peer coping-skills training for childhood aggression. *Journal of Clinical Child Psychology*, 23, 193-203.
- Stark, K.D., Swearer, S., Sommer, D., Hickey, B.B., Napolitano, S., Kurowski, C., & Dempsey, M. 1998 School-based group treatment for depressive disorders in children. In K.C. Stoiber & T.R. Kratochwill (Eds.), *Handbook of group intervention for children and families*. Allyn and Bacon, 68-99.